

# 『謡曲秘要抄』の紹介と翻刻

樹 下 文 隆

ここに紹介する『謡曲秘要抄』（架蔵）は、縦二十四・一穂、横十七・一穂、雲中に鶴の艶出し文様を施した紺色表紙の右肩に「謡曲秘要抄」と墨書した題簽を貼り、冊末に「嘉永四辛亥年林鐘古梅軒満寿／再写之」との書写識語がある袋綴一冊の謡伝書である。墨付三十一丁、片面十行で、一部に朱の書込があり、扉（遊紙）と冊末書写識語の右に「梅若／蔵書」の方朱印がある。

書写者の「古梅軒満寿」は、幕末の観世座地謡方であった梅若孝次郎満寿のことで、その事績については、竹本幹夫氏「梅若徳太郎家の伝書」（『能楽タイムズ』五七〇号、一九九九年九月）及び、中尾薫氏「幕末の地謡役者―梅若満寿の謡書付をめぐる―」（『演劇映像学』二〇〇九 第四集、二〇一〇年三月）に詳しく紹介されている。それらに拠ると、早稲田大学図書館に『梅若家能楽資料』として一括された三百点余りの資料群の大半が満寿の手になるもののように、本書も、筆跡は他の満寿自筆本と等しく、また蔵書印も一致するので、もともとは梅若家の蔵書で、たまたま市場に出してしまったものと思われる。その内容は、二〇二〇年六月刊行の『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』十四号に翻刻紹介した金如鉄旧蔵『謡書』（早稲田大学図書館蔵「能・謡・囃子秘

伝書」の内。樹下文隆・長田あかね・大山範子「近世謡伝書の総合的研究（一）早稲田大学図書館蔵『謡書』の解題と翻刻」。以下、翻刻『謡書』と称す。）と、一部を欠くもののほぼ重なっている。『謡書』と比較すれば、意味を取り違えたと思われる箇所が多く、脱落と思われる箇所も見受けられる。しかし、『謡書』を写したものでないことは用字や誤謬箇所の不一致から明らかで、稀に『謡書』の誤謬を訂正しうる箇所も見られ、『謡書』のごとき体裁の近世初期謡伝書に基づく写本の一つと目される。『謡書』の如き体裁の謡伝書が江戸時代を通して需要のあったことを示すものとして、崩れた形の伝書ながら、ここに翻刻しておきたい。

注目すべきは、第二丁表「一調二機三声」記事の末尾に記された「右是、道入記置也」の「道入」に「人ノ名カ」と墨書きさ込みのある点である。すでに満寿の時代には、それが大蔵大夫道入を差すことがわからなくなっていたのだろうか。もしくは、この箇所は「節章句秘伝之抄」では「右是は入道記置なり」となっており、「道入」と「入道」が満寿の見た伝書で混同していたことを反映しているのだろうか。他にも、世阿弥の「音曲声出口伝」に登場する「祝言」と対になる用語「はうをく」の「はう」に、

満寿は再三「わうか」と朱で記しており、これも意味がわからなくなつていて、「横豎」の「横」に取り違えたものと思われる。

翻刻に際しては、対照の利便を考慮して、翻刻『謳書』と同様、おおむね以下の処置を施した。

・漢字と仮名の別、仮名遣い、送り仮名は底本通りとし、漢字の異体字や旧字体は通行の字体、新字体に改めた。但し、「哥」「鉢」など若干の異体字は底本のままとした。変体仮名は現行の平仮名に改め、可能な限り、句読点・濁点を施した。

・朱や墨による行間注記は（ ）内にその旨を記した。また、ごく一部の略字については（ ）内に正字を記した。なお、送り仮名や助詞が朱で補われているものは、いちいち朱であること断らなかつた。

・『謳書』にあり、本書にない記事については、※印を付して「」内にその旨を記した。

### 一調二機三声之事

調子を機に持なり。吹物の調子をねとりて、機に合せすまして、目をふさぎ、息を内へ引て、扱声を出せば、こはさき調子のうちより出る也。調子斗ねとりて、機にも合せずして、声を出せば、こはさき調子にさうなくなりて、調子をば機にこめて、扱声を出す故、一調二機三声と定る也。又云、調子をば機に持、声をは調子にて出す。文字をば唇にて分つべし。文字にもか、はらぬほどの曲をば、顔のふりやうにてあひしらふべし。

毛詩曰、情発於声、声成文、謂之音。』(一オ) ※「右觀世世阿弥作」有。」

又曰、一調者先一番に調子を本とす。何事に付ても、調子を専とせり。殊更謡には第一調子のちがひては聞れざる物なれば、一調子とか、れたり。二機と云は、文字移りを肝要と云こ、ろ也。されば、謡をばはた物と謡ふ也。はた物といふこ、ろは、たてよこほそくせいして織布オリモノは美しく、糸ふとければ織布オリモノうつくしからず。染色もまたうつくしからねば、いかにもく糸を細くして織たるは染色もうつくし、されば文字移りは糸也。染たる紋モノはふし也。いかに能ふしを覚ても、文字移り荒ければ、あらしき布に美しき』(一ウ) 紋を染るがごとし。こ、をもつて二機とは書れたり。三声といふは声也。是は五音の心得也。声の色ちがへば、一円に其謡相当せず。謡が孝(教)る物也。祝言の謡ならば祝言の声を以てうたふべし。幽玄ならば幽玄の声を出すべし。五音何れも同事也共、謡が孝(教)る物なれば、謡の文字にあひたるやうに謡ふべし。(右是、道入記置也) (道入)に「人ノ名カ」と傍記)

一、声あやをなすといふ事有。是も声を分つこ、ろ也。あやの紋といふもの也。おなじ色にて紋を付る物也。其如く、謡はいづれも同じ様也と謡ふなれども、色々の曲又節』(二オ)をおもしろく云が則紋也。猶口伝在之

一、三曲といふ事は、曲を三ツに定る事也。何とて三ツに定るなれば、天地人の三才也。上中下、此三ツより外はなき物也。故に

五音三曲と名付る也。三曲の口伝は、一大事の義なれば、書記しがたし。是は口伝に可申間、書付不申也。

一、横堅の二字の事。是も大事のことなれば書付不申。口伝を御忘間敷候。此横堅は、五音の謡に何もはづる、事有べからず。横堅の二字斗にて謡ふ物にて候。横堅を知らざらん謡ひ手は、謡にては有べからず。能々常に此二字を御心懸候て、御謡ひ有べく候。右、道入如斯記置と』(2ウ) いへども、横堅の心持あら／＼し申候。か様にして必秘事うしなひ申物にて候。努々他見有べからず候。

横堅の二字、たとへば堅横也。きぬなど織る堅横と心得べし。ふとくほそく取ませ候。此謡ひ様、横の声は横也。声をふとくつよく出して、堅の声をば声をか、え、ほそく出して、息をもよわく謡ふ也。如斯いたし候へば、声をも息をも抱ゆるにより、謡ふに声をやすめ候。五音の謳うたともに、此二字を肝要と心得らるべし。凡五音といふ事は、鹿園院殿、世阿弥に謡と云物にも秘事の有かと御尋の処に、中々御座候と申上る。然らば其』(3オ) 謡ひ様を書付て差上可申よし被仰出候時、五音を作しけると承及候也。

一、謡を五ツに分し事は、五字、五仄、旺相死同老(朱で「満寿考曰、王相死困老黒煙ノ六之内之五歟、八門頓甲ニアリ」と注記)、青黄赤白黒、池水火風空、何れも五ツに分てり。謡も其如くとして五音と付たり。されば、如斯五音と云事を、世上に人不知。其子細は、謡を五ツに分ちたると斗心得て、声を分つと

云事を知らず。是は常に謡ひ分て、功者に能々聞せてなほすべし。吾とは更に知られざる物にて候。されば書物にも、一調二機三声とか、れたり。』(3ウ)

一、祝言の謡ひ様の事。是は春の始の御祝と云がごとし。更に別なる義有べからず。字性たゞしく、心の内に祝言の心を含て、する／＼と曲がましき事なき様に、直に謡ふべし。声も祝言のこゑたるべく候。

祝言の引哥

万代を松にぞ君を祝ひつる千とせの陰にすまんとおもへば

それ久堅の神代より 天地開けし国の起り 天の二銚の直なるや 名も二はしらの神こゝに 八島の国をつくりおき すべら世なれや大君の 御影のどけき』(4オ) 時とかや あをによし ならの葉守の神心 〳〵 すゑくらからぬ都路の すぐなるべきか昔原や 伏見の里の宮作り 大内山の陰たかき 雲の上なる玉殿の 月も光りやみがくらん 〳〵 (伏見・金札)

一、幽玄

右、此意得は、謡をながびかして謡ふにはあらず。此謡は、いかにも／＼心の内に幽玄を思ひ含て謡ひ、たゞ祝言の様にやはらかなるべし。花山に入て日を送りしが〳〵としか、れたり。此謡の心持は、ちと耳どほに思召候はんづれ共、此道長く候て心の修行候へば、此位を』(4ウ) 覚る也。能々常に御心懸肝要に候。

幽玄の引哥

又や見むかた野のみの、桜狩はなの雪ちる春のあけほの  
さなきだに物のさびしき秋の夜の 人目まれる古寺の 庭の  
松風ふけすぎて 月もかたぶく軒端の草 わずれて過しいにし  
へを しのお顔にていつまでか 待事なくてながらへむ 実何  
事も思ひ出の 人には残る世中かな 唯いつとなく一筋に  
頼むの御手の糸 道びき給へ法の声 迷ひをも 照さ  
せたまふ御誓ひ』(5オ) 〳 実もと見えて在明の ゆくへ  
は西の山なれど 眺望は四方の秋の空 松の声のみ聞ゆれ共  
あらしはいづく共 定めなき世の夢心 何の音にかさめてま  
し 〳 (井筒)

一、恋慕

右、此心得は大事也。ふかく思ひ入候はねば、恋慕の声に成候  
はず。思ひ入すこし候へば、又無常に成てきかれず候。されば、  
連歌などにも恋の句はしよき物の、また一大事なる物と承及候。  
其如く、此曲は謡ひよき物の、謡はれぬ物と申候。能々分別し  
て、常に御心懸候は』(5ウ)では成間敷候。

恋慕の引哥

忍ぶれど色に出にけり我恋は物やおもふと人のとふまで

※「夕の嵐つまならん」有。」さびしき夜はの鐘の音 鶏籠の  
山に響きつ、明なむとして別れをもよふし せめて聞もる月  
だにも しばし枕に残らずして 又ひとり寝になりぬるぞや  
翠帳紅闇に 枕ならぶる床の上 馴しふすまの夜すがらも同穴  
のあと夢もなし よしそれも同じ世の 命のみをさりとともと

いつまで草の露』(6オ)のまま 比翼連理のかたらひ 其驪山  
宮のさ、めぐとも 誰かき、つたへて 今の世までもらすらむ  
さるにても我つまの 秋よりさきにならずと 夕の数は重な  
れど あだし言葉の人心 頼めてこぬ夜はつもれ共 檻干に立  
つくして そなたの空よと詠れば 夕暮の秋風 あらし山おろ  
し野分も あの松をこそはおとづるれ 我まつ人よりの 音信  
をいつきかまし せめてもの かたみの扇手にふれて 風の  
たよりとおもへ共 夏もはやすぎの窓の 秋風ひや、かに吹お  
ちて 団雪の扇も雪なれば 名をきくもすさまじくて 秋風恨  
あり よしや』(6ウ)おもへば是も実 あふは別れなるべし  
其報ひなれば今さら 世をも人をも恨むまじ たゞおもはれぬ  
身の程を 思ひつゞけて独居の 班女が聞ぞさびしき(班女)

一、哀傷

右、此曲一大事也。呂律口伝あり。謡より謡の出たる事、一の  
秘事也。大方の心得にては成がたし。此曲は春夏の面白き事共  
を榮じてはて、茅屋にむしのこゑ幽かなるがごとし。され共、  
是は哀傷を思ひ過し候へば、謡よわく成てきかれず。譬へば枯  
野に霜の芦を見るが如し。謡はしをれずして、心の内には哀傷  
をおもひ含み』(7オ)たるを、哀傷の謡の本とす。此心得をも  
知ずして、人毎にあはれがらせて謡ふこと、此曲の本味をしら  
ざる也。口伝条々在之。

哀傷の引哥

浅茅生や袖に朽にし秋の霜わすれぬ夢をとふあらしかな

残りても かひあるべきはむなしくて 〳 あるいはかひなきは、きゞの 見えつかくれつ面影の 定めなき世のならひ 人聞うれひの花ざかり 無常の風音そひ 生死長夜の月の影 不定の雲おほへり 実目の前〔7ウ〕のうき世かな 〳 (隅田川)

## 一、闌曲

右、此曲は位たけたる曲なれば、謡も至らずしてはきかれず。但此曲は前の四音を能謡ひ覚候へば、又此曲も心得ゆく也。前の謡の習ひのごとくし候て謡ひくだし候へば、此曲も前の四音のゆうをもつて謡ひ候也。譬へば、庭の松を見事に面白くかさをゆひ枝をふるまはせ候へば、人ことに面白しと見候。但能々見候へば作物なれば、更に面白くもなき物也。たゞ自然に年ふりてこびたる松の枝を面白く振廻し候が面白く候。たゞ作物に候ては更に聞れず、』(8オ) 謡の位ゆき候へば、おのづから年ふりたる松のごとく有べく候。能々心懸肝要也。

## 闌曲引哥

いつしかと神さびにけりかぐ山のむ杉がもとに苔のむすまで  
それ哥は天地開けし始より 陰陽の二神あまのちまたに行あひ  
の さよの手枕むすび定めし よをまなび国を治めて 今も道  
ある妙文たり うらとはせ給へや 哥占とはせ給へや 神  
風や 伊勢の浜荻名をかへて 〳 よしといふもあしといふ  
も おなじ草なりと聞ものを 』(8ウ) 所は伊勢の神子なりと  
難波の事も問給へ 人心 ひけばひかる、梓弓 いせや日向の

ことも問給へ ひうかの事もとひ給へ(歌占)

闌曲は、恋慕の謡にまじりて苦しからず候。是は子細あり。口伝に申候歟。さのみ謡に努々有べからず。但、祝言の謡の中に闌曲にうたふ謡あり。是又第一の秘事。

一、此五音の外に、かん曲と云曲あり。五音と定めて又余の事は有間布マキかなれども、是は哥の六義也。右此曲味は、心に閑なる心持を思ひ合て、謡をもいかにも閑に謡ふ也。曲がましく候へば謡ふべからず候。されども、此曲は(9オ)五の謡をよく〳〳心得候へば、必此曲もこびて面白くなる也。此外に謡の上に別の秘事有べからず。私存候分は残さず書記し進上之。此書物返々斟酌シソヤウながら、長々在奈良させられ候て、御稽古候御心指切に候へば不浅伝候所也

矢満葉

天文廿年霜月廿一日

道人在判

毛詩曰、情発於声、声成文、謂之音。

一、音曲の習ひ様、二色に有べし。謡の本を書人の、曲を心得て、文字移りを美しくつくるべき事、一。又謡ふ人(9ウ)の、ふしを付て、文字をわかつべきほど、一なり。文字によりて、か、りには成て、五音たゞしく、句移り・文字くさり、すべやかにき、能て、なび〳とある様にふしをば付る也。扱謡をば、其曲を能心得て謡へば、曲の付様、謡ひ様、相応する所二面白きかん有べし。しかれば、ふしの付様を以て謡の羽風とす。文字移りうつつして、すみにごりの曲似相たる、か、りにはなる也。ふ

しは行、文字移・曲は真也。凡、息も機も同物、ふし・曲と云も同じ文字なれども、謡ふ時に習様別也。稽古云、声を忘れて曲を知れ、調子を忘れて拍子をしれといへり。又音曲を習条々、先〔10オ〕文字を覚る事、其後ふしをきはむる事、其後曲を色取事、其後声の位をしる事、其後ねを持事。拍子は初中後へ渡るべし。

一、曲になまる事。節なまりは不苦、文字なまりはわろし。文字なまりと申は、一切の文字、性が違へばなまる也。節なまりとは、てにはの字の性は※「いひながす詞の吟のなびきによりて、性は」有。」違へども、節だによければ不苦候。能々心得分て口伝すべし。手ノ葉の文字の事、て・に・の・せ・え・て・も・し、か様のほくりがなの性は違へども、か、りよければ不苦。節と申は、大略てにをはの文字の声也。※「惣而音曲をばいろはよみにはうたはぬなり」有。」かなのうちをひろひて、つめひら〔10ウ〕きを、てにをはの字にて色どるべし。

平 上 去 入 四声  
五 音 合 習 有

一、声をつかふ事、声のむきたる時をうしなはじとつかふべし。声の葉共も、つかひたる後に吞べし。声の能なる相なり。声をつかふ事、其声の様によるべし。声につかはれてよきもあり、声をつかひてよきもある也。横豎共にある声を相音と申也。宵眺の事。宵には物数をつかひて、眺ちとすくなくつかふ〔11オ〕

べし。殊更、わうの声などをば、眺には声につかはれて、声を用いたはりて、をさめ声を本につかふべし。返々、声のむきたる時をうしなはじと嗜むべし。

一、音曲に祝言はうおく（朱で「わうおく歎」と傍記）の声のわけをしる事。是は呂律の二より出たり。呂と云は悦ぶ声、出る息の声也。律と云はかなしむ声、入息と云也。先、根本を心得べき様、如此。祝言の声は、機を躰にして、機に声を付て出す事也。（貼紙して「花ニ日はつよき言声也。是は呂ノしやうね也。つよき声はいきをいたす儀にあたるべし」と朱書）是音声也。律（朱で「呂」と訂正）の声しやうね也。機を入てつよき声は、息を出す機にあたる也。是、呂の声也。悦声也。然ば祝言也。はうおく（「はう」に朱で「わうなるべし」と傍記）の声と云は、声を躰に（「11ウ」して、機をゆるくもつ。是やすらかによわき心也。機をゆるくもつは、入息のこゝろ也。是律の機也。あはれなるしやうね也。然ばはうおく（「はう」に朱で「わうなるべし」と傍記）と名付。去程に、祝言の声には機はる故に、調子のはるくせ有。茅屋（「茅」に朱で「億なるべし」と傍記）は機をゆるくもつゆゑに、調子のさがるくせ有と心得べし。（「茅屋」と頭書。「茅」の左に「アシ／チカヤ」、「屋」の左に「イヘ／ト、マル」と朱書。「オトロヘ淋しき心」と朱書。）一、音曲に曲舞たゞ音曲との分めを知る事。曲舞と申は、一だうより出たる故に、只音曲とは黑白のかはりめ有。しかれば、又文字にも曲に舞を添たり。惣名曲舞と云に、曲舞と書たるを以、

各別有とはしるべし。此けぢめと云は、曲舞は拍子が躰を持也。只謡は声が躰をもつて』(12オ)拍子をば曲に添たり。しかれば、曲舞は拍子が躰を持故に、曲舞と云文字を曲に添たり。去程に曲舞といへり。立て謡ふ懸り也。ふうたい(朱で「風躰敷」と傍記)より出る音声也。然ば、各別の事にて、曲舞はくせまひのたうにて、あまねく謡ふ事はなかりしを、近代曲舞をやわらげて、きくふしをまじへて謡へば、言葉ことに面白き也。面白く聞ゆる故に、当時は殊更曲舞のかゝり、第一翫となれり。是は、亡父猿楽のわざに曲舞を謡ひ出したり。去によつて、此曲普く賞し也。白髭の曲舞の曲、最初也。去程に、曲舞懸りの曲をば大和音曲と申たり。かゝる程に、曲舞の節のこはさ』(12ウ)きをやはらげて、小謡の節に成行処に、曲の道少づ、違ふ所を人知ず。曲舞にも小謡曲まじり、謡にも曲舞の懸り有。然共、面白き事は肝要なれば、ひがこと、は申さぬ也。たゞ、此分めをしらざれば、道をとほるべき導師は絶たるなるべき事、本意を背也。抑、曲舞と只音曲のかはりと云は、曲舞は拍子を躰と謡ふ曲なれば、文字を拍子が持によりて、文字も句移りもかろく、又拍子にひかるゝによりて、所々なる性有。なまれ共、一通りに聞えておもしろきふしあり。拍子の面白きしやうねまじるによりて、少なまる所も一躰のかゝりに聞ゆる也。』(13オ)是を曲舞懸りの不審とす。只謡と申は、拍子にてかざる事もなく、只有のまゝに謡ふ故に、文字の性まぎれず。音曲の髓のあらはれ、さしことは只詞よりして、一句一曲に至る迄、身(朱

で「耳敷」と傍記)をすまし心をしづめて、謡ふ人も聞人も、同心一曲の感に應ずる。則是しきかんあり。

毛詩云、正得告動天地、感鬼神謂之感。

かくいへるも、此感有故にあらはすと云ふ。身心おどろかすかんと、天地をうごかすと云。形をやはらぐる処を、鬼神を感じしむるといへり。然者、真の正風をあらはす故に、文字も句移も性なり。其中に上手のわざと云は此性を色』(13ウ)どる也。性は無文也。然ども上手と申は此無文の躰よりむだうのもんおのづから曲をいたす、是を声あやをなすと云へり。曲はあらはれたる文なれば有文のあや也。声は無色なるにあやをなせる所、是上手の妙音なるべし。無文のあや也。此躰を妙所とは申也。

享徳三年六月五日

此本世阿弥より相伝秘蜜更以不可有他見者也可秘々々』(14オ)  
※「くらしいの大事86条有。」

心の大事

一、心の置所、へその下に置て、とびくるはぬ様に心持也。

声

一、声の出所、へそもとより出し、口の真中にて謡ひ、おとがひをはり出し謡ふべし。いきの切所、鼻のさきにてきり、文字おとがひにてつかひ、はよりそとへ声を出し謡ふ也。

一、こうぢ謡の大事。調子双調にて謡ひ出す。

一、声つかふ大事。宵には黄鐘、晝平調にて謡ふ也。是は声の平

調に出る時の口伝有。』(14ウ)

一、謡を人にをしへ申事。どうより声を出し、口の真中にてうたはせ候也。

一、さし、おとがひをはりて謡ふべし。

一、曲舞、前のさしは、どうより声を出し謡ふ也。

一、よみ物は、謡の如く、どうにおとがひに情を入れて謡ふもの也。

一、曲舞の出しは、のどより声を出す也。上はほんの拍子は臆

〔おとがひ〕をミセケチて傍記より謡ひ出す也。又一拍子はおとがひより謡ひ出す也。

一、くどきはのどより謡ひ出し、おとがひにて、はりて謡ふ也。

一、次第の出しは、臆より声を出す也。

一、出は、野宮の類なるは、おとがひより謡ひ出し、「抑是は」と

(15オ)云は、胸よりは是を謡ひ出す也。

一、きりへ成て、曲舞のはてはの移、おとがひにて謡ふ也。

一、舞の和哥、胸の少下、水落よりは是を出し候也。

一、和哥はいきをきりてのるべし。

一、言葉の出し、おとがひより出すべし。

一、詞より色にかゝる所、是はおとがひ※「より出すべし。詞より色えかゝる所、是は」有。」よくはり、臆より謡ふ也。

一、折はへその下より謡ひ出すべし。

一、小謡の出は、どうより声を出し候也。

一、出は、「あら有難や」と云出はの心は、何も胸より声を出し候也。

一、唄のくせと申は、なへ声、のどにて謡ひ、声のひゞくつく。』(15ウ) 大口成謡、是等くせ也。

一、さしの後のさしは、おとがひより謡ひ出すもの也。

一、謡にあひだをあらし謡ふ事、有べからず。また謡にこする事有べからず。

一、謡にこゑいらぬもの也。声ありても謡のくせあればいらぬ物也。

一、大事千万おぼえても稽古なく候へば、いらざる事也。

右の書物、観世弥次郎大事體二写、小次郎に渡す者也。小次郎また永田源十郎へ写渡す者也。

元亀元 観世小次郎／元頼在判(16オ)

一、論義請取渡しの事。初一段はいかにもゆるくと出し、次第につめよせて請取渡すべし。後は字の内よりいひかくべし。言葉論義もつたい(問答ト言コトカ)と傍記)等、此心持有べし。

一、女の方へいひかけ、いかにも謡やはらかに、うつくしくいひかけべし。男の方へは、いかにもつよく、修羅などはけなげに、

其能に應じてそれくの心持肝要也。女能にも、真女・そう女(「そう」に朱で「さう」歟)と傍記。「草女カ」と頭書)遊女とて有

其差別、心持肝要也。真女と云は、野宮・楊貴妃・定家、此等の類也。そう女と云は、采女・百万・葛城・松風、此等の類なるべし。遊女とは、遊屋・静・祇王、此等の類なるべし。謡ひ

やう多し。何れも其心かはるべき也。』(16ウ)

一、とむるはやし、とめぬはやしとて有。是第一肝要也。太鼓の

有にもなきにも、とむる・とめぬ有べく候。秘事也。口伝有べき也。

一、謡に、しらめをうたふ謡をうたふと云事有。鼓にも、しらめをうつ、鼓をうつと云事有。しらめをうたふと云事は、謡によりて有。よく相伝可有候。清経の曲舞に「しんこんに残る」と云、当麻には「かんるいきもに」と云所也。何れもくく様の心持肝要也。謡の内に段々有べし。謡の上にて稽古肝要也。

一、しまひに寄ての謡ひ様有べく候。』(17オ)

一、舞まふ曲舞、まはぬ曲舞の謡ひ様、口伝有。

一、中入の謡様、いかにも引立て謡ふ也。

一、順の謡、思ひざしの謡、何れも謡ひ様有。順の謡はさう成べし。おもひざしのは嗜むべき也。

一、貴人の御謡ひ候には早く付る也。人の謡に付候、謡ひ出して句をきる所にて付る也。何も謡の内同前也。

一、上はにもろあげ、かた上とて有。真女はいづれもかた上也。男脇は何ももろ上也。もろ上・かた上、口伝有也。

一、謡の内、詰開肝要也。

一、さかもりるとき、切など早く謡ふ事不可有候。』(17ウ)

一、からみと云事、大事也。秘事也。口伝在也。

一、あらはる、はやし、あらはれぬはやしと云事有。

一、曲舞の内、詰開肝要也。謡ひ様口伝有。

一、元服の謡ひ様、謡ひ切る事をいむ。鼓も打切らず。

一、舟の中にての謡、うたひ返さぬ也。鼓も打返さぬもの也。

一、髣取よめ取の調子、塵芥抄に有分是にのせず。是も謡ひ返さず鼓も打返さぬ也。

一、曲舞のうち、さしごと、云事有。是秘事也。人普く是を知らず。譬ば「むかし此国にすむ人の有けるが宿をならべて門のまへ井筒によりてうなひ子の友だち(是よりかゝる)と傍記)かたらひて 互(18オ)に影を(井筒)と云より謡ふ也。他は準之。

一、三字はねの事、同じ心にはね候はあしき也。始を少しおもく、中を大に、末をかるく候て能候。譬ば「甘泉殿」と云所の類なるべし。

一、二字はねも二つならばぬ様にはね候。惣じて、一字はねをもはねやう有べし。末を引ずりては、ぬるく悪し。前を少引、はね所を舌をあげて付て、きつちりとはぬる也。

一、重点の所、是も跡先ならばぬ様に謡ふべし。譬ば、「出入人跡かずく」の(東北)、後を軽く謡ふべし。又一字の内の重なるも同じ。「硯をならしつ、(関寺)と云所の類、是も前に同じ。』(18ウ)

一、字とかなどの謡ひ分有べし。譬ば「はるけき野の宮に」(野宮)、「所は三芳野の」(二人静)、「身は古寺の軒の草」(芭蕉)の類、「野」の字はおもく、かなの「の」は軽く、「古寺の」の「の」は軽く、「軒」の「の」は重く候べし。此類多かるべし。

一、拍子にまたぐるふし、きらふ事也。され共世にそのさたなし。但妙人共面白くこゝをよせて謡ひ、或は捨て軽く謡ふ所を案ず

れば、皆またぐる所の用捨と覚候。口伝有。

一、引おとすふし、引廻す節と云事有。是秘事也。口伝有。

一、ふしも、同字をならべて謡ふ事悪敷候。譬ははる所のならぬ、「松の声のみ聞ゆれ共 嵐はいづくとも」(井筒)、「松」もはり上、「(19オ)「声」もはり上、「嵐」も、世にはり上候。此「嵐」、直にふしを付候。又宗節は直に謡はれ候。是にて可心得候。又「藤さきて 松にも花をかすが山」(采女)、此「松」もはり上、「はな」もはり上。是も「松」を直に、「花」を斗上るしやう也。「青かりし葉の秋 又」(熊野)、この「又」、すぐなる声也。此類数をしらす。又はり上る斗にも不限。此分別、惣躰へわたるべし。

一、謡へか、りばの事。早く懸り候へば延過候。俄に懸り候へば、字あたり行あたり候てきつく候。其間口伝に有。

一、ふしもなき所に面白がらせて節を付る事、大に嫌ふ事也。』(19ウ)

一、はる字はへる字、へる字ははる字と云事有。是は、大なるは大からず、ちいさきはちいさからずと云心也。過たるはなほし及ばざるがの心なるべし。

一、謡も同じ心持なるべし。うつくし過候へばよわくなり、つよくと申せばあらくなり候。所詮、つよからずよわからず、面白くしておもしろからず。只何の聞所もなく、わるき所もなきを、上手のわざとは申べし。此分別専要の心持也。さりながら、よき声、その身のかうをもつて、謡ひ所をぬかさず、なにとなく

すらりと謡ひ候へば、いたらぬ耳にも、いづれとは弁ずして、面白き事かぎりなく、いきがつまり候也。』(20オ)是を妙人とはい申べき也。

一、五音、呂律、宮商角徵羽の位をはなれて、ふしはなき物にて候。其位、其あて所を相違なき様に覚ゆべき事、肝要なるべし。

一、さし声とさしごと、はちがひ候。又さし声も色々有事にて候。鼓もなくて云さし声と、鼓の有て云さし声、一せいのさし声、何れもかはり候。一声のまへのさし声は、かるくとはいやして云声也。鼓もなくて云さし声、弥大事二候。さし声などの分、能々稽古有べく候。山姥に、「実や常に承る 西方の浄土は十万億土とかや」など云様なる所を、さしごと、申候。』(20ウ)

一、惣じて、謡は下曲舞の所を能々心に入て謡ひ、あげてよりちとやすらかに謡ひ候。何れおろかにはなきものにて候へ共、上てよりは力入ものにて候間、ちと安らかに謡ひ、さぐる所には、必調子もさがるものにて候間、能心を入て謡ふべし。

一、せばき座敷にて、高調子は更に似合候はず。ひき、調子にて、謡をいきくと、声をもぬかり候はぬ様に謡ひてよく候。ひき、調子はぬかるものに候。謡をいかにもぬるげに、しかも声をおけやかに謡ふべし。

一、或は貴人の御前、或は祝言の座敷、又は人の方にては、』(21オ)心をしづめ謡ふ。御所望の時などの心持、其所の禁句、受領・官名・名乗、其外何事をもかねてより尋、心がけ専要也。

一、一番能の内、後を前に謡ひて、前を後に謡ふべからず。

一、謡は、あたる文字に、いかにもつよくあたり候へば能候。あたる字にはたとあたり候はねば、謡すくむものに候。

一、しをる所、大事のものに候。調子の位違ふ事有もの也。又聞にくき様にしをる人も有。口伝可有候。

一、さし声、大事のものにて候。はたくと云出す事、成がたく候。殊に脇の能は、曲舞・さしこゑのくだりを』(21ウ) いきくと云くだし候はねば、曲舞しづみ候。曲舞しづみ候へば、能もうきくとなきものに候。

一、くどき、大事のものに候。文字を人の耳に入やうに、さはくと、さすが哀なる様にくどくべし。此筋め、心得られぬ事也。哀なる次第をも、人の聞分候はでは、何事ぞとおもふもの也。

一、名所、或は海上、或は合戦場などの様を謡はんには、今眼前に見るやうに、それくとを心に思ひふくみて謡ふべし。か様に申として、おもひ入を過し、ふしからせ候へば、大に嫌ふ事に候。』(22オ)

一、さしあたりての嫌ふ事

文字なまり、文字の性ちがひ、またぐる事、ひづみ、落ざる所を呂へおとす事、字がかなへつき、かなが字へ付事、水くらひ、いきの事。凡此等は、いづれの流とてもよろしからず。

一、五音の口あひの次第

上音 中音 中音ノ上 下音ノ中 (朱で「下敷」と傍記)

あ い う え を 口すこし舌

一 一 一 一 (各段を朱線で繋ぐ)

か<sup>ア</sup>き<sup>イ</sup>く<sup>ウ</sup>け<sup>エ</sup>こ<sup>オ</sup>少<sup>カ</sup>舌<sup>ク</sup>(22ウ)

さ<sup>ア</sup>し<sup>イ</sup>す<sup>ウ</sup>せ<sup>エ</sup>そ<sup>オ</sup>少<sup>カ</sup>舌<sup>ク</sup>

た<sup>ア</sup>ち<sup>イ</sup>つ<sup>ウ</sup>て<sup>エ</sup>と<sup>オ</sup>したの字は、下音ノ下也

な<sup>ア</sup>に<sup>イ</sup>ぬ<sup>ウ</sup>ね<sup>エ</sup>の<sup>オ</sup>したの字上音ニ用也

は<sup>ア</sup>ひ<sup>イ</sup>ふ<sup>ウ</sup>へ<sup>エ</sup>ほ<sup>オ</sup>くちびる

ま<sup>ア</sup>み<sup>イ</sup>む<sup>ウ</sup>め<sup>エ</sup>も<sup>オ</sup>くちびる

や<sup>ア</sup>い<sup>イ</sup>ゆ<sup>ウ</sup>え<sup>エ</sup>よ<sup>オ</sup>のんど

ら<sup>ア</sup>り<sup>イ</sup>る<sup>ウ</sup>れ<sup>エ</sup>ろ<sup>オ</sup>舌

わ<sup>ア</sup>る<sup>イ</sup>う<sup>ウ</sup>ゑ<sup>エ</sup>お<sup>オ</sup>のんど(細字片仮名は朱)

春 夏 土用 秋 冬

角 徴 宮 商 羽

双調 黄鐘 一越 平調 盤渉』(23オ)

(五行・五音・五調子を線引きして繋ぐ。)

あかさたな はまやらわ 此字は何れも上音也。

いきしちに ひみいりぬ 此字は上音の中音也。

うくすつぬ ふむゆるう 同前也。

えけせてね へめえれゑ 此字は下音の中音也。

をこそとの ほもよろお 此字は下音也。

但、此内のみの字は上音也。との字は下音也。

右、是は四十五字ならひ也。一大事の秘事也。髓き事なれ共、知ずしては文字に違ふ也。音曲の大事、四十五字の習と云事、是也。常に心がけ、千度百度稽古可有也。』(23ウ)

一、五音之内六之次第

第一、口内と云事

やいゆえよ、わゐうゑお。是は、のんど・口にて云字也。余の所にていへば、字わろくかた事也。

第二、ぜつの文字と云事

あいうえを、かきくけこ、さしすせそ。此字は、舌半分はたらかし、口にて云字也。

第三、きないと云事

はひふへほ、まみむめも。此字は、色々口伝有といへ共、是を、は・くちびるにあて、きばで云字也。』(24オ)

第四

たちつてと、なにぬねの、らりるれろ。此字は、舌にあたりて云をよしと云也。舌に宛ねばいひがたし。一字宛舌に宛るべし。

第五、鼻内と云事

いきしちにひみいりゐ、うくすつぬふむゆるう。此文字は、はなにかけて字をつめて云也。鼻へいらねば、文字筋なき事也。

第六

たん、ちん、つん、てん、とん、なん、にん、ぬん、ねん、のん、らん、りん』(24ウ) るん、れん、ろん。此文字は、舌のさきにかけて、字をかかずべし。舌のさきにかけてねば、きこえずして、口の内わろし。

右、此一帖は、常々友なひ申一両輩、謡に心をよせ給ひ、つれ／＼のをり／＼は、一ふし一曲を催し給ひて、古人の申伝

へ、聞及ぶ所の吉悪を、有ける座に在あひぬれば、耳のふせうながらも、聞をりし時の序に、家々の古き書物共、反古の中より、しみのつゞり残しどもの有しを、取出しぬれば、右の人々よみて見て、或は能の事、或はわきの作法、或は鼓太鼓の事共、書交ありければ、見分がたくて、能せぬ人の為には、謡の邪魔にも』(25オ) 成べきや。所詮、謡の方斗を書出し候へかしと有しかば、誠いらざる事と思ひながら、狂人はしれば不狂人も走るとやらん、彼是の中にて、書集一冊となせり。猶又、精き事共は、大略塵芥抄に見えたるを、是にのせず。又、古人の語伝へし事共の、耳に残りしをも、片端書のせぬるも有。此等は、定て言葉のつゞき、ふつ、か成べし。塵芥と両冊のうち、常々御覽有て、心にかけて給ひ、又は、一音は無音の師とも思召取て、此みち知人あらば、一言御相伝有、御稽古有べし。稽古もなく、人にも尋給はずしては、いかで能道をしろしめすべけんや。如何様の抄物を持給ひて、』(25ウ) 自見候ても、人に聞せて直され給はずは、ひが事たるべきか。世に広く、音曲又は音曲の大事とて、抄物共所持の人々は見及候へ共、音曲の上手とは承及ばず候。然る時は、一大事のわざ、深きやみに入るがごとしと覺待りぬ。五音と云は、謡によらず、ふしによらず、只心のかはりめと聞え候歟。然ども、五つに謡ひ分候。此心のごとく、謡ひ覚え給はゞ、上手といひつべき歟。譬は、哀なる謡に候とて、文字も聞えぬ様に、あはれがらせてはきかれず。謡と申事、一様に心得給ひなば、御不覚たるべき歟。誠に思へば、禁中の御

噂、神祇・仏法・経説・歌道・田夫・野人・賤山賤の事、(26オ) 魔界の事共に至るまで、作り入候へば、謡をしらぬ人とても、道々の事共聞あらはずべきものなれば、恥しきしわざなるべし。此道をすき給ひて、人中にて謡ひ給はむには、一番なり共よく遊ばざるべきか。只物数のみにわたり、善悪の穿鑿もなく、大般若よみのごとくにては、其身にすきの心には相違せり。それ／＼の謡、五六番能極め、常に工夫あらば、おのづから心得給ふべき物歟。闌曲と云は、四音を極めて後、たけたる位にやす／＼と謡ふと也。誠はひとり音曲と申伝へ候也。先々、四音をよく究給はゞ、音曲は人の前にても、時の調(26ウ)子を心につけ、機に引入て、謡ひ出すべき事肝要也。下て謡ふ所もなく、上て謡ふ所もなく、むらのなき様にあらまほしく候。あがりさがりのむらあるは、ひゑ鳥の飛ぶ様に候とて、古人も嫌ひ候よし聞及びぬ。又、声をほそめ、ふとむる、大に嫌ひ候。音曲をすくし、面白がらす事、下手のわざ歟。我耳に入様成を、声きく音曲とて嫌ひ候。我謡ひて、人にきかする様に謡ふものと申伝へ候。文字ことに心を付て、しかも文字に心をとめぬやうに謡ひ候。ふしもなき所にふしを付、声をなやし謡ひ候とて、面白くはなく候。只、ふしもなく、(27オ)字かな、てにはをば、あざやかに謡ひ分、字ごとに心を付、心のうちにはそれ／＼の思ひ入あれば、其道々の感情を聞出し、面白きとは申也。月夜とも闇ともしらぬ人の上からは、何の穿鑿も有まじく候。ふしと申は十ばかりならではなきものに候間、安き心が

けにて候。惣の謡のふし付と成べく候。のべしゞめ、おもきかるき、しづめはやめゆき、いきつぎ字移り、拍子の行様、肝要の大事と申候は、能ことに、「なづともつきぬ岩ほならなむ」(采女)と云様なる所、有ものにて候。か様の所を、さのみ拍子にもかけしろはずして、かる／＼と云ながして、「松の葉」(27ウ)の」と、やす／＼といひ出す事、古人も多くは聞ざる旨申伝候也。か様の所に起臥心を懸給はむ事、此道の命たるべく候。引文字も拍子は定まりたるものに候。大方謡は直に美しく、静に軽く、おもてにふしのなき様にて、又よくき、て、付てうたへば、ふしこもる様にて、静なるかと思へばさきへ行、しかもゆる／＼として、こはからず、よわからず、うはばしらず、したるからず、さすが優にやさしき様に謡ふを、よき謡と申べき歟。又、悪しき謡と申は、うち聞たる所やかましく、ふし多く、浮沈み、声をふとめ、ほそめ、のべ過、また藜ちゞみなどして、(28オ)上ばしりして、さすがしだるく、文字聞えず。かなは字に付、字はかなに付、ふし多き故に、文字なまり、文字ひづみ、字をあらし付て見れば、拍子はづれ、是らあしき謡とは申也。文字さは／＼と口の内さやかに、しかもほげやかなるを、よきと申伝へ候歟。能も謡をはかせとする物なれば、地の謡のべしゞめ、軽々として仕よく、謡のふしはかせのべしゞめの様に働くよし也。能と謡と別々にては、あしだとあしなかとはきたるがごとしともいひおけり。謡も、一ツ橋などふみはづさじとわたる様に、あぶなく謡ひ候ては、更に面白かるまじく候。拍子も」

(28ウ) 声も、たぶく〜と行処へゆきとゞきて、謡は軽々と候を本とす。但かるきと申せば、しるき道にくだり坂をはしる様なるは、おちつかずして悪し候。行とゞかぬ様に謡ふ事、返すく〜然るべからず候。又貴人の御前にて長き謡は無仕付の第一と申候。又調子をば能しれる人に御習ひ有て、吹物の傍にて常にしらべ給はゞ、おのづから覚ゆるものに候。拍子はわが心のまゝにまかせ、跡にもつき、先にもたて、ふところへも入る様に候はでは、あしかるべし。拍子の違はぬほどの心がけにては、役には立がたかるべく候。御嗜み専要也。か様の申事、我ながらかた』(29オ)はらいたく候。穴賢、く〜。

#### 稽古十三首

わらはべに謡す、めてつらぬるをおかしともみよ狂哥誹諧  
謡数覚えてよきは一調子二機三声の符も法もいれ  
五音とは謡の奥の習とは最初にしらで叶はぬといふ  
あら謡習ふ始の一返耳にとむるを肝要ときく  
覚えたる謡を人の稽古あらば今を始めて聞く只にせよ  
師の謡おもき軽き的心えはつけて謡ふにしられこそすれ  
教るは習ふより猶音曲の稽古として友をかたらへ』(29ウ)  
音曲に文字を覚えて曲を覚え曲を色どる三ツをしれとか  
稽古せず座功もいらす心がけぬ謡はいかで晴にた、まし  
稽古せず辛身シジシもせず謡をば上手になるといふ秘事もがな  
音曲は上手になりて心をば初心にもと云をしへけり

種々の習ひありといへども口馴て謡ふ人こそ上手とはなれ  
教ると習ふとにこそ其人の謡のくらゐあらはれにけれ

#### 心持十五首

音曲の二字の心もしらきぬのうら声になる事ぞかなしき  
師の道を軽く思ふに音曲の文字も拍子もおもくなりけり  
師の道をつよく謡はゞ梓弓いかでか本のふしにかへらむ』(30オ)

甘草を口に含る心あらば謡のふしはおのづからなる  
心がけば謡の身持只くせは鏡見るにも及ばざりけり  
寄合て初心く〜の謡にもまた其うちの巧者にはつけ

稽古する時にもはれの謡にも上手のあたり見つ、覚えむ  
謡をも拍子もちがへいひかけば心みだれず本筋にやれ』(30ウ)

※「他に六首有。声二十首(実は19首)、調子十首、口伝二十首(実は19首)と続く。」

#### 雑

目をふさぎ心を遠くやる謡見ひらきて又きろめくもうし  
乱酒には長き謡やよきふしのこもる謡はうたはざりけり  
神鬼や執心の鬼女鬼謡も能もかはるとぞきく  
四季に土用五性には位音曲の五音に軽き心はなれず  
立役に道をつくると云事は初わきに限る口伝有けり  
脇はたゞ物のきやうと立所せりふを云に口伝有けり  
心こゑにはつすといへば謡ふ時異なる事をおもはぬぞよき』

(31オ)

謡ふ時目の付所一疊のたゝみを見こすほどややよからむ

音曲に三重あがりと云事は平家にさのみかはらざりけり

詞にもくどきにも似ず呂の声は平家のやうにいふ習ひあり

音曲はゆうにやさしくよわからで静に軽くゆるくとあれ

※「他に25首有。」

天正二夜も長月に此哥をよむ※「は徳丸肥前高長」有。  
これも元は和歌仕立。」

嘉永四辛亥年林鐘古梅軒満寿／再写之」(31ウ)

(本書の書写者「古梅軒満寿」が梅若満寿であること、  
謡伝書研究会の席上、高橋葉子氏より御教示いただいた。  
記して感謝申し上げます。)